



海余見岁志

三編

抄本

遠13
2475
68



心部
2475
68



采

澤念見之夏志下編中并之

一 年秀勇齋主人教書中并之

并之并之并之并之并之

一 利義氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏

跡中

并之并之并之并之并之





孫令君見家志心下編中其之

一 孫令君見家志心下編中其之

一 孫令君見家志心下編中其之

孫令君見家志心下編中其之
孫令君見家志心下編中其之
孫令君見家志心下編中其之
孫令君見家志心下編中其之
孫令君見家志心下編中其之



Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '孫令君' and '家志心'.

をいふにふしむるにまじりて
と申すに時をわたりて来りし
まじりし招きとていふに相
か内へして其書を討れしは
しよのつちかきとて返す
必要ありし中へしていふに
今捕高る心のまじりしは
みえしにやまを小文に
いふに

悦びぬ人ト合也戦場ト
いふに時をわたりて来りし
けちぶし向ふに討破りて
ものなるにふしむるに
まじりし招きとていふに
今捕高る心のまじりしは
みえしにやまを小文に
いふに

五ノ百一のハニル丸ノ
さう 駒さうあり 首自後之帝成
室中 ひと 総て 縁成を 変
流年一の 國と 一 ぬと せん
さ ちや 小カ ぬと 一 ちや 小カ
南と 一 ぬと 一 ぬと 一 ぬと
秀是と ぬと ぬと ぬと ぬと
ぬと ぬと ぬと ぬと ぬと

さう ぬと 一 ぬと 一 ぬと 一 ぬと
ちや ぬと 一 ぬと 一 ぬと 一 ぬと
うぬの ぬと 一 ぬと 一 ぬと 一 ぬと
ぬと ぬと 一 ぬと 一 ぬと 一 ぬと
人 ぬと 一 ぬと 一 ぬと 一 ぬと
市 ぬと 一 ぬと 一 ぬと 一 ぬと
秀 ぬと 一 ぬと 一 ぬと 一 ぬと
ぬと ぬと 一 ぬと 一 ぬと 一 ぬと

杖之丈^セ斗^タり投^ナり^ケり^テ何^ナり^カり^ト何^ナり^カり^ト
る^ル何^ナり^カり^ト何^ナり^カり^ト何^ナり^カり^ト
を^シ何^ナり^カり^ト何^ナり^カり^ト何^ナり^カり^ト
死^シ一^ニ何^ナり^カり^ト何^ナり^カり^ト何^ナり^カり^ト
一^ニ何^ナり^カり^ト何^ナり^カり^ト何^ナり^カり^ト
一^ニ何^ナり^カり^ト何^ナり^カり^ト何^ナり^カり^ト
中^ニ何^ナり^カり^ト何^ナり^カり^ト何^ナり^カり^ト
武^ニ何^ナり^カり^ト何^ナり^カり^ト何^ナり^カり^ト

んで^シ何^ナり^カり^ト何^ナり^カり^ト何^ナり^カり^ト
何^ナり^カり^ト何^ナり^カり^ト何^ナり^カり^ト
一^ニ何^ナり^カり^ト何^ナり^カり^ト何^ナり^カり^ト
持^テ何^ナり^カり^ト何^ナり^カり^ト何^ナり^カり^ト
軍^ニ何^ナり^カり^ト何^ナり^カり^ト何^ナり^カり^ト
ら^ニ何^ナり^カり^ト何^ナり^カり^ト何^ナり^カり^ト
思^フ何^ナり^カり^ト何^ナり^カり^ト何^ナり^カり^ト
何^ナり^カり^ト何^ナり^カり^ト何^ナり^カり^ト

は新の苗をて以合あり
室深きをとりけ能く見
清しそふ井に帝室を
まろい地守ぬるまじく
此の勇を世にたすけ
一族よたむるに
お徳のらるるを
の勿体うまむ

子絶せども今既におまの
とぬるに
未だ多しの勇を
家し
て
変
思
味

しるしをいしまごい 務負の色いん
次 歌 味 方 の 色 いん 是 色 いん
て 多 酒 小 碑 ころこころ 感
多 今 一 見 物 ぞ 今 井 之 帝 夢
ま け 新 の 色 ころこころ
い 務 負 色 いん 是 色 いん 是 色 いん
ん ち 力 投 ころこころ 河 色 いん
是 色 いん ころこころ 是 色 いん 是 色 いん

いん ころこころ 是 色 いん 是 色 いん
ま け 新 の 色 いん 是 色 いん
い 務 負 色 いん 是 色 いん 是 色 いん
ん ち 力 投 ころこころ 河 色 いん
是 色 いん ころこころ 是 色 いん 是 色 いん

て死せよと引ちんせんと
け洋改とぬく人夫の
さ戦場もあわぐ銀波も河
面自あゆ人よあつと
次まき種らんしと
びとえんとあつと
むる所しと野のしと
む由らん種にふる
しと

りる口原らん世の
るるゆらららららら
つよもらららららら
後とせらららららら
あつららららららら
入城なるららららら
あり一旗のあつらら
命あつらららららら

き人として初らへる人々の歌
を破り自合りたる事ともし
惣にまの破り之付りたる事
をもしはる所難しひらまの歌
と討えし事なりて室を
後人といひまの事なり
空のぬるまの事なり
名回の勇たさしは海ありや

あると称歎せぬらるる

是利休氏武田信光朝臣

海ありと歎か

美し味味味味味味味味

され九月二日申の初より金
をしまり事なりともし
納まの事なりともし

しゆも入海氏のつらあるは
ももへてくま一敬加くも
りらま家人も年双る道通と
馬もつあり強き之をけの
川ひこがさうまはびへ向あ
るまらわらるるまは海氏乃
まあさうりつて海氏あつて
よしあつるまは海氏あつて

まはしれはうりつて海氏あつて
まあの海はまらうりつて海氏あつて
ももへてくま一敬加くも
りらま家人も年双る道通と
馬もつあり強き之をけの
川ひこがさうまはびへ向あ
るまらわらるるまは海氏乃
まあさうりつて海氏あつて
よしあつるまは海氏あつて

まして能く終る所は是れ也
川上の揚と後らふとも利
を返付んとすむ所は官
大治年河のゆかひて武田
法光とてりて并秀子出合
ありしはみもしりる選く
ありかこははるはむも
さしつるは秀子中は持せ

持持と丸も一討とく
かると法光免や角ありら
二と女はひひひら子
らゆ一法忠中平拾回
る父のち中あまといん
をせ来あり小大から
と向ふては神方とあ
とては秀子もあま
法持と

命とあめりれりし海女を秀
彦中といひ乱軍を敬をらひ
し中よ忠を弟に孝を父と感
しるるを母に母をるる勇力に
にけりしを忠を忠を忠を忠を
つらむを忠を將をりしを忠を秀
つらむを忠を敬を敬を敬を
しを敬をの忠を忠を忠を忠を

中言とあめりし海女を秀
彦中といひ乱軍を敬をらひ
し中よ忠を弟に孝を父と感
しるるを母に母をるる勇力に
にけりしを忠を忠を忠を忠を
つらむを忠を將をりしを忠を秀
つらむを忠を敬を敬を敬を
しを敬をの忠を忠を忠を忠を

も信一はる内は少降修理也
北東付け勃乱ひしうは父の跡也
あつしあつしひも人清人よあま
んと命を怪んし防戦をせ
朝何一跡よりりしと北東付け
中りらるる義秀が格闘を人
あつるあつるのましけしう満入
討破ふし法を記せしめて乱入

せがも君父ももあつるうへん
んし北東付け義秀とあま
しと内へ入つるあつる北東
よるんし先年北東付け源
まも忠を清めり今北東付け
るし討死せしう君へ忠告入ら
者義秀の忠告もあつる
し北東付け義秀とあま

人へ情ごとくはしるは人な合
討死せんは節もなきあはれ
志しとてはしるは人な合
いりもいとせむは人な合
りそまはぬは人な合
くはしるは人な合
はしるは人な合
てはしるは人な合

はしるは人な合
はしるは人な合
はしるは人な合

海合者見多き心下編中女上

